

①短期大学部

② 入試区分

I 期A日程

③ 出題科目

現代の国語・言語文化（古文・漢文を除く）

④ 出題の意図

問題の一は、井筒俊彦「人間存在の現代的状況と東洋哲学」から出題。「地球社会」という観念の現代的意義について論じた評論文。設問では、漢字の書き取り・読み、空欄補充、指示語の指示内容、慣用表現の意味、述部に対応する主部、文脈をふまえた理由説明、キーセンテンスの補充位置などを問うている。問題の二は、小林康夫『若い人のための10冊の本』から出題。著者の人生の指針としての「フランス語」について述べた文章。設問では、漢字の書き取り、キーセンテンスの言い換え箇所、キーフレーズの具体的把握、空欄補充、文脈をふまえた理由説明、キーワードの比喩的言い換えなどについて問うている。問題一は本格的評論文を、問題二はエッセイ風の論説文を読み解く問題となっている。

現代の国語・言語文化「古文・漢文を除く」

一次の文章を読んで、あとの設問（1～7）に答えよ。

人類の未来という大きなテーマになんらかの形で関わるような論議や会話が、最近、いろいろなレベルでよく行われるようになってまいりましたが、そんな時、「地球的グローバル」という形容詞が使われるのを屢々しばしば耳にします。例えば、「地球的危機」だとか、「地球的统一」「地球の融合」だとか。このシユの語句を耳にしても、我々はたいして気にもとめずについて聞き流してしまうのが普通ですけれど、よく考えてみますと、こういう言葉がよく使われるという事実は、それ自体さわめて注目に②する現象であり、実は、それが人間の現代状況のひとつのケンチヨな特徴であるということができるのではないかと思います。現に今回の国際シンポジウムの主題をなす「地球社会への展望」も、まさにこのシユの表現の④的な一例であります。未だ存在いまもしていない「地球社会」のありうべき構造について、これを一つの切迫した問題として真剣に考えたり論議し始めた人々がいる。それもたんに、世界中のあらゆる民族、あらゆる個人が、幻想的至福の陶醉境にひたりながら生存することのできる、なにか遠い未来の夢の国について考えるというようなことではなしに、もっと現実性のある課題として真面目にそれに取り組んでいる人たちがいる。これはたしかに注目すべき事態であるといわなくてはなりません。 A

これが昔なら、いや、ほんの十年ほど前ですら、もし誰かが「地球社会」の構想などについて云々うんぬんしただしたら、そんな人は、たどころに、⑥やくたいもない夢想家か、さもなければ精々のところ、現実となんの関わりもない茫漠ぼうもくたる理念や理想を、己れの心のなかから紡ぎ出して、その幻影を追いかける理想主義者として片付けられてしまったことでありましょう。ところが今日の我々には、「地球社会」が、もはや少しも奇妙な幻想的響きをもたなくなってしまうまし

た。この表現が喚起する意味形象は、幻想的で非合理的なものではなくってしまった。それどころか、それは、少くとも我々が未来を考え、未来における人間存在の基本的形態を心に描く場合の知的展望に欠くことのできない^⑧ 枢要なものとなりつつあるのです。この意味において、「地球社会」の観念は、今や、我々が世界と人類の未来図を構想する時、どうしても考えに入れざるをえない緊急問題の重要な局面として、我々の思想と感情を決定的に支配し始めているといつてよろしいかと思えます。 B

つまり、それは我々の一人一人が現に当面している目前緊急の問題なのです。考えてみれば、当然のことです。例えばイランで起こる事件やアラブ社会で起こることが、日本人の日常生活にそのまま響いてくる。遠いアフリカの片隅の事情が、たちまち日本人の思想に反響を引き起こす。そんな世界に生きている我々は、世界中の様々な国々を一種の統一体にまで結びつける「地球的」^⑨ 軛帯の重みを、ことごとく感じずにはいられないのです。 C

今日では、いかなる民族、いかなる国も、もはや「誇り高き孤立」^⑩ の状態に存在することはできない。あらゆるものが、互いに密接に結び合わされている。全存在界を^⑪ の相互連関の網として表象するのは、決して原子物理学の世界像や大乘仏教の華嚴哲学だけではありません。もっと世俗的な生活に密着する領域―例えば経済、政治、法律というような存在領域―でも、我々はあらゆる事物、事象の相互連関、相互依存症をいやでも認めざるをえないのであります。 D

要するに、今日の我々にとって、もはや世界は、互いに独立して存在する多数の事物、事象の複合体ではなく、むしろ限りなく複雑に錯綜する相互連関的存在の網のごときのものでありまして、世界のこのような現在の状況を背景として考察するとき、「地球社会」はもはやたんなる空想ではなく、何かもつと強烈なインパクトをもつ力として現われてくるのであります。 E

（井筒俊彦「人間存在の現代的状況と東洋哲学」による）

設問

1 傍線部①③⑦⑧について、カタカナには漢字を、漢字にはその読みをそれぞれの語群から最も適切なものを選んで記号で答えよ。

- | | | | | | |
|---|--------------------|--------|--------------------|-------|--------|
| ① | ア 殊 | イ 趣 | ウ 朱 | エ 守 | オ 種 |
| ③ | ア 賢猪 ^{ちよ} | イ 顕著 | ウ 検蹠 ^{ちよ} | エ 圈徴 | オ 兼貯 |
| ⑦ | ア ふせ | イ と | ウ つむ | エ こ | オ かつ |
| ⑧ | ア くよう | イ ひつよう | ウ じゅうよう | エ きよう | オ すうよう |

2 空欄②④⑪について、それを埋めるのに最も適切なものをそれぞれ選んで記号で答えよ。

- | | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|--------|
| ② | ア 資 | イ 供 | ウ 値 | エ 抗 | オ 利 |
| ④ | ア 特徴 | イ 類型 | ウ 論理 | エ 行動 | オ 典型 |
| ⑪ | ア 重々無尽 | イ 奇想天外 | ウ 意味深長 | エ 縦横無尽 | オ 五里霧中 |

3 傍線部⑤「それ」について、それが指しているものは何か。最も適切なものを選んで記号で答えよ。

- ア 地球社会への展望
- イ 遠い未来の夢の国
- ウ 現実性のある課題
- エ 「地球社会」のありうべき構造
- オ 人類の未来

4 傍線部⑥「やくたいもない」について、その言葉の意味は何か。最も適切なものを選んで記号で答えよ。

- ア 無意味なこと
- イ めちゃくちゃなこと

ウ 役に立たないこと

エ 実体のないこと

オ 困ったこと

5 傍線部⑨「我々の思想と感情を決定的に支配し始めているといつてよろしいかと思います」とあるが、何がそうすると筆者は考えているか。最も適切なものを選んで記号で答えよ。

ア 喚起する意味形象

イ 「地球社会」の観念

ウ 人間存在の基本的形態

エ 世界と人類の未来図

オ 日本人の日常生活

6 傍線部⑩「『誇り高き孤立』の状態に存在することはできない」とあるが、筆者がそう考えるのはなぜか。この文章全体の流れを踏まえて説明せよ。

7 この文章にはつぎの一節が欠落している。それを挿入するのに最も適切な箇所はどこか。A～Eから選んで記号で答えよ。

しかしながら、「地球社会」の観念が有意味的に関わる領域は、決して未来だけではありません。それは、むしろ、今、ここでの我々の実存にじかに関わってくる。

二 次の文章を読んで、あとの設問（1～6）に答えよ。

こうしていまでは半世紀以上前ということになるが、わたし自身の高校時代の二冊の「重い本」との出会いを語って見たのですが、パスカルと中原中也という国も時代もちがう二人の人の世界が^①コウサするところに「フランス語」という外国の言語が浮かびあがってきたわけで、前章の末尾に書いたように、——これは、わたしの人生のひとつの「秘密」ですね——わたしもまた、「わが人生、なによりもフランス語に賭ける」という選択をしたわけです。大学に入って二年目くらい、だいたい二〇歳^{はたち}直前のころだったと思いますけれど、母国語ではない他者の言語を通して、この世界を別様に感覚し、理解し、生きてみたいということです。間違わないでいただきたいのですが、フランス語を使って実用的な目的を達するというものではありません。そうではなくて、フランス語が包含しているわたしの知らない世界、^②日本の風土とはあまりにも違う異邦の世界をすこしなりとも生きてみたい、という強い憧れ。実用ではなく、憧れこそ^③がドウキです。それだけが、人を真に動かすものなのです。

そこに至る経緯を少しだけ述べさせてもらいますが、わたしは理系の人間だった。高校を出て入学したのが、東京大学理学科I類、理学部あるいは工学部へと進む学生たちの科類。物理学を専攻するつもりでした。じつは、——多少パスカルにも似て、と言いましょか——わたしは小学生時代から自然科学に強い興味があり、たしか小学校六年生くらいでその当時発見されていた素粒子の名前を全部覚えていたくらい。エンリコ・フェルミというイタリア人の原子物理学者に憧れてもいた。そして中高時代、数学もそこそこできた。で、将来は物理学でノーベル賞でもとろうか、と周囲に^④ジヨウダンも言っていたのですが、——もちろん、^⑤あとから劇的に衝撃性を強める方向に多少の脚色はしていますが——東大の最初の数学の授業（忘れもしない、杉浦光夫先生の「解析概論」、偏微分方程式論）で、その思いがりが一挙に崩れ落ちる。

教室に入ってきた杉浦先生、どうもフランス帰りだったようで銀縁の眼鏡に手をかけて「フランス語で授業してもい

いんだけどね」とか言いながら、さっとチョークを手にとると黒板いっぱいになんて数式を書いていく。あとから思えば、ε（イプシロン）δ（デルタ）論法という基本的な論法なのだけど、ギリシア文字がとびかい、わたしにはまるでチンプンカンプン。茫然^{ぼうぜん}としていたら、わたしの隣にいた級友が手を挙げて「先生！ その三行目、違ってますよ」と。先生、「ああ、そうだそうだ」と訂正。わたし、啞然^{あぜん}。その一瞬のうちに、こりやノーベル賞無理かもね、と悟りました。最初の授業で自分の限界を見極めたという意味では、なかなか⑥ 的。学校というところは、もちろんなにかを学ぶ場でもあるけれど、それ以上に自分の能力・感覚・論理の限界をきちんと見極める場でもあるわけですから。

わたしの大学入学は一九六八年です。君が生まれるはるか以前の「神話的時代」ですが、この年はいわゆる「全共闘運動」という学生運動が日本の多くの大学のキャンパスを揺り動かしていた年。東大も例に漏れず、いや日大と並んでその最先端（なにしる翌年の東大入試が中止に追い込まれたくらいですから）、夏のはじめには全学ストライキに突入で授業はなくなり、校舎はわれわれ学生によって占拠封鎖され、構内では連日デモと集会というカオス的狀況。わたし自身も「物理学」という人生の羅針盤を失って、この混沌^{こんとん}に巻き込まれて行くのですが、ある意味では混沌以上の「学び」はないのかもしれない。二年くらいのカオス的混乱を経て、辿り着いた人生のひとつの指針が「フランス語」であったということですね。

⑦ だが、それは、すでに述べたように、「フランス語」を「専門」にして身を立てようというのではなくて、むしろ逆に、物理学とか建築とか、あるいは法学や医学、歴史学、フランス文学、経済学といった制度のなかで確定した「専門分野」を選ばないための選択でした。「専門分野」ではなく、ただ漠然と「フランス」、もっと正確に言えば「パリ」を目指すということ。⑧ 人生に「方向」を与える。それが具体的になにをもちたらずのかはわからないけれど、この「扉」を開けるぞ、という決意です。

（小林康夫『若い人のための10冊の本』による）

設問

1 傍線部①③④のカタカナを漢字に直せ。

2 傍線部②「わたしの知らない世界、日本の風土とはあまりにも違う異邦の世界」とあるが、これは具体的にはフランスという国を意味しているが、筆者が考えているどのように生きるかということから来ている表現でもある。それを示す三十字以内の部分を本文より探し出し、はじめの五文字を答えよ。(句読点も一字と考えよ)

3 傍線部⑤「あとから劇的に衝撃性を強める方向に多少の脚色はしていますが」とあるが、「劇的に衝撃性を強める」とは具体的にはどのようなことを強調しているのか。次の中より一つ選び、その記号を答えよ。

ア フランス語が驚くほど難解なものであったこと

イ 物理学が自分に必要のないものであったこと

ウ フランス語との出会いが決定的であったこと

エ 物理学への執着が強いものであったこと

オ フランス語と物理学が比べものにならないものであったこと

4 空欄⑥に入る二字の言葉を次の中より一つ選び、その記号を答えよ。

ア 文学 イ 経済 ウ 究極 エ 社会 オ 情緒

5 傍線部⑦「『フランス語』を『専門』にして身を立てようというのではなくて」とあるが、なぜ「専門」ではないのか。本文を踏まえ、その理由を明らかにして三十字以内で説明せよ。

6 傍線部⑧「人生に『方向』を与える」とあるが、「フランス語」が筆者にとってそうした「方向」を決めるものであったことを比喩的に表現している五字以内の言葉を本文より指摘せよ。

一		1	① オ	③ イ	⑦ ウ	⑧ オ			
2	② ウ	④ オ	⑪ ア						
3	エ								
4	ウ								
5	ウ								
6	世界がもはや限りなく複雑に交錯する相互関連的な存在の網になってしまった以上、「誇り高き孤立」は望んでも実現することが不可能なものであると考えているから。								
7	B								
二		1	① 交差	③ 動機	④ 冗談				
2	この世界を								
3	ウ								
4	イ								
5	専門（分野）が、社会の制度の中で決められたものであるから。								
6	羅針盤								